

中川和明著

『平田国学の史的研究』

本田 伸

平成一三年（二〇〇一）一〇月、東京代々木・平田神社伝来の平田篤胤関係資料（以下、平田家資料）について国立歴史民俗博物館の調査・整理が始まった。やがて、当時の宮地正人館長と樋口雄彦助教を中心とする研究チームが立ち上げられ、目録化と資料翻刻が進められた。中川氏は研究協力者としてこの作業に関わり、平田家資料の生の姿に触れてきたが、本書はその成果を積極的に取りこんで、篤胤の学問と思想的背景、及び新たな篤胤像に迫ろうとする意欲作である。

本書は四部構成で、全一四章からなっている。

序論 研究史と本書の課題・構成

第一部 講説家篤胤の登場と講釈本

第一章 『古道大意』の形成と刊行

第二章 『俗神道大意』の刊行と古道学の立場

第三章 『西籍慨論』と国学・漢学の衝突

第四章 『出定笑語』及び附録と自筆稿本の秘蔵

第二部 平田国学の誕生と篤胤の幽冥研究

第五章 『靈能真柱』と平田国学の誕生

第六章 『古史伝』と国学運動の展開

第七章 仙童寅吉一件とその波紋

第八章 勝五郎再生一件と国学的転生観

第三部 篤胤の国学運動の展開と幕府の弾圧

第九章 西洋科学の衝撃と篤胤の蘭学観

第一〇章 篤胤の国学思想と『西洋雑記』

第十一章 文政六年上京一件と国学運動

—新史料『上京日記』を中心に—

第十二章 幕府の弾圧と篤胤の江戸退去

第四部 平田国学の隆盛と幕末維新

第十三章 篤胤の著書と国学運動

第十四章 幕末平田塾と地方国学の展開—弘前国学を例に—

結論 総括と展望

本稿では、平田国学と青森県との関係が分かる部分を主に採りあげることにしたい。なお、平田家資料は現在、国立歴史民俗博物館の所蔵となり、報告書や目録が刊行されている。そこには、『気吹舎日記』や『金銀入覚帳』など重要資料の翻刻文も掲載されているので、本書を繙く場合は、それらとの併読が必要不可欠であることを、まず断っておきたい。

国学の泰斗というイメージが強い篤胤だが、その学問は実に幅広く、特定の枠に収まりきるものではなかった。国学者としての立場から仏教・儒学の批判はしたものの、それらに関係する書物を読まなかったわけではないし、洋学についても、ロシア語資料を筆写したり、インド地理学を学んだり、できる限りの資料を渉猟し、読解に努めた。仏教に対する『出定笑語』、漢学に対する『西籍慨論』、山村才助（大槻玄沢の門下生で、新井白石の原著の誤りをオランダ地理書などによって訂正補足

した『訂正増訳采覧異言』の著者)の『西洋雜記』に登場する西洋古伝に注目しこれを取りこんだ『靈能真柱』『古史伝』など、篤胤の膨大な著作は、学問的欲求に従った研究と考察の上に立った持論展開の例として理解すべきであろう。その辺りは、本書第一部第三・四章や第三部第九・一〇章で詳しく触れられている。

篤胤の名を世に知らしめたファクターとして重要なものに、幽冥研究がある。本書では、篤胤が神仙界で呪術を修行してきたという「天狗小僧」寅吉と同居して得た体験談を綴った『仙境異聞』を第二部第七章で、自らを生まれ変わりと標榜する男について記した『勝五郎再生一件』を第八章で取りあげている。興味深かったのは、同じテーマを扱った池田冠山『勝五郎再生前生話』との比較がなされている点である。冠山が仏教的転生観をベースとしたのに対し、篤胤はこれを批判し、国学的転生観を提起したという。文政五年(一八二二)十一月に前世の記憶を語り出した勝五郎。翌年春に武蔵国多摩郡中野村の勝五郎を訪ねて聞書を作った冠山。それを読んで勝五郎や冠山と逢い交流を深めていく篤胤。三人の関係が本書では分かりやすく整理されており、実証性を重んじる篤胤の姿勢を、ここからも窺うことができる。

弘前市立弘前図書館や青森県立郷土館には、鍔胤からの来信を初めとする多くの関係書翰が残っているが、それらは『青森県史資料編 近世学芸関係』(二〇〇四年、青森県、以下『県史学芸編』)に集約的に掲載されている。筆者は県史編さん事務局員として『県史学芸編』の編集に関わっており、中川氏にも調査協力員として参加してもらったが、こうした地元資料と平田家資料とを横断的に見ることのできる立場にいた氏

のアドバイスは、実に有用なものであった。この時の成果は本書の第四部第一四章に活かされており、その後の氏自身による研究蓄積を盛りこんで、より厚みのある内容となっている。例えば、平田家資料の整理作業によって初めて紹介された『気吹舎日記』などによれば、文政三年(一八二〇)、篤胤は津軽寧親から講釈を依頼され、大いに喜んだという。整理すると、

三月二三日 本所の津軽屋敷へ初めて出かける。

三月二五日 津軽公へ「古史成文」「古史徴」を提出。

四月一七日 津軽家から「古史成文」「古史徴」の代金について問い

合わせあり。

四月二五日 代金として一兩三步二朱を受け取る。

となるが、篤胤と津軽家の関係がかなり早い段階から築かれていたことが分かったのは、収穫と言えよう。

天保一二年(一八四一)、著作『天朝無窮曆』の内容が幕政批判に問われ、江戸退去を命じられた篤胤は、故郷秋田への退転を余儀なくされた。しかし、江戸の私塾である気吹舎は、養子鍔胤の巧みな経営手腕により発展を続けた。篤胤著書の頒布システムを確立して地方の好学家と密なやりとりを重ね、篤胤死去後の新規入門者を「没後門人」として篤胤の学問的直系に組み入れた。

彼らは各地で活動を展開したが、津軽からの最も早い入門者が鶴屋(鶴舎)有節で、安政三年(一八五六)一二月に気吹舎へ入門願を送り、翌年一月に『門人姓名録』へ記載する旨、鍔胤から伝達された。鶴屋は前々から気吹舎に篤胤著書の送付を依頼し、入門が実現すると、今度は

周囲にも入門を勧め、紹介者の役割を担うようになる。親友の平尾魯僊（魯仙）を初め、今村真種・岩間滴・三谷大足・小野若狭など、和歌・俳諧を通じて親交のあった人々が勉強会に名を連ね、さしづめ「津軽国学グループ」とでも呼ぶべき活発な活動が、幕末の弘前城下で行われていた。これらの点は、中川氏と小島康敬氏による『県史学芸編』第四章の解説「津軽国学の系譜」でも触れられているところである。

中川氏は、篤胤著書の価格表「著述書写本目録并筆紙料覚」（青森県立郷土館蔵、『県史学芸編』資料No.五四）を詳しく紹介しているが、こうした価格表は長野県の高森町歴史民俗資料館所蔵の同名文書（『国立歴史民俗博物館』報告書一二二に翻刻文あり）の例があり、気吹舎と地方の国学者の関係を知る上で、注目すべき資料と言える。ところで、「津軽国学グループ」の場合はそこに通信教育の要素が含まれてくるわけだが、そのような私たちは他の地域でもみられるのだろうか。資料の残存状況との兼ね合いもあるが、筆者には、地方の人々がどのようなきっかけで平田国学を受容していくようになるのか、また、その過程はどこまで明らかにできるのかという課題がまだ、残されているように思う。弘前・盛岡・秋田といった北東北諸藩における平田国学の展開状況についてもぜひ考察してもらいたいと、期待を込めてお願いしたい。

本書を通じて浮かび上がるのは、篤胤が、極めて理性的に学問の奥義に迫ろうとする姿勢を見せていた点である。他の意見を受け入れ、みずからの枠を広げようとする精神の柔軟さを持っていたことを理解しない限り、篤胤の思考の本質には行き当たらないだろう。平田国学は幕末維新期の社会変革に関わった人々に大きな影響を与えたが、その影響ぶり

を、勤王論の主導者としての国学者のイメージに引きつけて語るだけでは、すでに不十分である。町人レベルの勉強会として出発した「津軽国学グループ」のように、平田国学が持つ学問的な面白さそのものに興味を覚えた人たちも少なからず居たように思えるからで、そうした新たな見方を提示している点において、本書は成功している。

（A5判、二〇一二年五月刊、名著刊行会、本文四二九頁、九〇〇〇円＋税）

【参考】国立歴史民俗博物館平田家資料の関連刊行物

- ①『明治維新と平田国学』展示図録（二〇〇四年）
 - ②平田国学の再検討（一）「平田家資料」翻刻 解題（二）（二〇〇五年、報告書一二二）
 - ③平田国学の再検討（二）「平田家資料」翻刻 解題（二）（二〇〇六年、報告書一二八）
 - ④平田篤胤関係資料目録（二〇〇七年）
 - ⑤平田国学の再検討（三）「平田家資料」翻刻 解題（三）（二〇〇九年、報告書一四六）
 - ⑥平田国学の再検討（四）人名及び書名索引（二〇一〇年、報告書一五九）
- ほかに、同館の刊行物ではないが、樋口雄彦氏を研究代表者とする『平田国学の再検討―篤胤・鍊胤・延胤・盛胤文書の史料学的研究』（平成一五年度―一八年度科学研究費補助金による）があり、その成果は④に活かされている。

(ほんだ・しん 青森県立郷土館学芸課研究主幹)

八戸市史編纂委員会編

『新編八戸市史 近現代資料編 都市計画』

『新編八戸市史 近現代資料編 戦争』

― 彙 報 ―

◎弘前大学国史研究会第八八回例会は、洋学史学会との共催で左記のと

おり開催された。

①福井敏隆氏「蘭方医から洋学者へ―佐々木元俊の場合―」

②佐藤賢一氏「弘前藩の測量家 清水定徳について」

平成二十四年十二月九日

(H)

このたび、新編八戸市史の近現代資料編が二冊同時刊行となった。既刊の近現代資料編Ⅰ～Ⅳは明治期から現代までを時系列で取り上げたものだが、今回はテーマ別資料編である。市長の巻頭言にもあるように、幾多の大きな災害を乗り越えてきた八戸市は、東日本大震災後も迅速な復旧と更なる災害に強いまちづくりをめざして八戸市復興計画を策定しているところである。『都市計画』と『戦争』は、復興と発展を目指す八戸市にふさわしい二冊である、と言えよう。

○『都市計画』 構成は以下の通りである。

第一章 都市建設構想によるまちづくり

第一節 近代成初期のまちの様相 第二節 大正期の都市建設構想

第三節 都市計画事業の開始 第四節 沈船防波堤の建設

第五節 北奥羽地域経済開発構想 第六節 上下水道の敷設

第七節 八戸の町並み

第二章 新産業都市指定によるまちづくり

第一節 新産業都市指定運動

第二節 新産業都市建設基本計画の推移

第三節 港湾・漁港と後背地機能の整備